競争と効率

椿 淳一郎

JunIchiro Tsubaki

本会の理事会において、第36回夏期シンポジウムのテーマが「粒子集合体の圧縮・圧密・濃縮」と決まり、世話人は世の鉄則通り提案者にと安易に決まった。せめてパートナーぐらいテーマにふさわしい人と思い、資源環境技術総合研究所の遠藤茂寿氏にご無理を言って、二人で準備を進めた。テーマの狙いは、様々な産業分野でそれぞれ個別技術として展開されている圧縮・圧密・濃縮操作を、粒子集合体の充填率を積極的に上げる操作として共通に括てみようと言うものであった。それで水処理における濃縮操作、セラミックスのプレス成形、医薬品の圧縮成形について、それぞれ荏原製作所の郷田昭一氏、村田製作所の石塚一嘉氏、名城大学の檀上和美氏に特別講演をお願いした。一般講演もまわりのご協力のお蔭で、世話人はほとんどが苦勞することなく18件集めることができたし、また50名近い参加者も得ることができた。講演に関しては、かなりバランスのとれたプログラムを組むことができたが、問題は三日目の総合討論である。こればかりは参加者を軟禁するわけにもいかず、最終日に何人残ってもらえるか、世話人の最も気になるところであるが、今回はほぼ全員に近い方々に参加していただくことができた。皆様のご協力にお礼申し上げます。特にお忙しい中、初日から最終日まで夜の懇親会も含めて積極的に討論に参加していただいた、3人の講師の方々には心よりお礼申し上げます次第です。

本シンポジウムの中身については、本号の掲載記事をごらんいただくとして、本シンポジウムは成功だったのか否か、元来ずばろで無責任な私は、学会の主催するシンポジウムの評価は人それぞれでよいと思っているので、このような設問自体に関心がないが、昨今はそんなのききなことを言ってはられないようである。大学でも自己評価、外部評価、認証制度が矢継ぎ早に導入され、評価結果に応じて予算が配分されると言う。研究費も経常研究費を減らし、新産業創出に「結びつく」プロ

〈著者紹介〉

名古屋大学大学院工学研究科物質制御工学専攻／分子化学工学専攻教授

旧国境世代第一期生。山形大学卒業後、修士、博士、助手時代を名古屋大学で過ごし、粒子形状、粉体物性の研究を行う。米国シラキュース大学で集塵を研究し、帰国後助教授に昇進。その後JFCCに移りセラミックス標準化事業を立ち上げ、94年に名古屋大学に戻り、微粒子集合体の濃縮過程にはまる。

プロジェクトが優先されている。教育と学問研究の現場にも競争原理と効率主義が導入された結果である。そして一方で、個性的で独創的であることが要求されている。評価結果に応じて予算が配分されると言うことは、評価者の理解を超えて個性的で独創的なものは、価値のないものとして排除されることになる。経常経費があれば白川先生の研究がそうであったように、細々ながらでも続けることができるが、これからはそうはいかない。評価基準を満たす「個性」と「独創性」しか認められない。もう一つの時代のキーワードに「規制緩和」があるが、最も規制が緩和されるべき、教育・学問研究分野で急速に規制が強められている。

教育の分野に「競争」と「効率」が馴染むのかどうかははなはだ疑問である。人が人として成長できるように援助することが教育ではないだろうか。個々人が自らの人格を形成することは、勝ったの負けたの世界とは全く異次元の世界である。赤ちゃんにお乳を飲ませる時に「効率」を考えるだろうか、効率よく手をあげば、その付けが何倍にもなって返ってくることは、昨今の少年犯罪を見れば分かることである。では学問研究はどうか、研究目標が同じならいざ知らず、一般には勝ち負けとは縁遠い世界で、卓球とテニスではどちらが強いかを論ずるようなものである。では無駄を省くためにはどうすれば良いか。無駄を無駄と識別できるのは、スタートからゴールまでの過程が分かっているからで、全く五里霧中の状態で、どうやって無駄を省くのか、効率を考えることが先ず無駄である。真理に到達する過程で経験する無数の「無駄」は、知識を体系化するときには豊かな肉付きとして活かされる。つまり学問研究において「無駄」を省こうとすることと自分が、それに要するマンパワーを考えると最大の無駄ではあるまいか。

90年代の日本は、経済政策の失敗で lost decade と呼ばれた。無駄なハコもの行政が日本の経済を破綻させたように、現在進められている文教・科学技術政策が、その意に反して日本の科学技術を脆弱なものにしているような気がする。今度は金の使い道だけではなく、人の育て方である。その失敗は decade どころか century にもおよぶのではあるまいか。教育機関に身を置く者としては、勝ち組として生き残ることだけでなく、原点に戻って教育や学問研究のあり方を考えなくてはと自戒する次第である。